

甲州金成立期の一過程

萩原三雄

はじめに

I 甲州金成立期の研究略史

II 出土「甲州金」について

III 戦国期金山における「金付着土器」について

IV 「甲州金」に至る技術的過程

V 勝沼氏館跡の金工房跡について

VI 甲州金の貨幣化

おわりに

はじめに

近年活性化の様相をみせつつある鉱山史研究の一翼を占める甲斐金山遺跡の研究と相まって甲州金に関する関心も少しずつ高まっている。かつては、戦国期甲斐武田氏研究の中で高い関心が持たれていた甲州金であったが、貨幣史分野からの研究以外には、しばらく歴史研究の枠外に置かれていた感が強く、やや停滞ぎみであったものの、最近の金山史研究の強い影響を受けたためか、再び活況を取り戻しつつある。しかしそうした甲州金に対する研究の大部分は、各種記録類をもとにした文献中心の経済史的、貨幣史的研究であって、甲州金を生成する過程、特に技術面については今日に至るもほとんど手づかずの状態にある。

最大の要因は、金の採掘の場である金山遺跡と製錬を始めとする鉱山技術の未解明にあったと言っても過言ではない。しかし、近年の金山遺跡に関する強い関心と精力的な調査研究によって、研究の隙間ともいえるその部分が照射され、その技術的過程がしだいに浮きぼりにされてきた。

本稿は、甲州金の成立期、そのなかでもとくに戦国期に焦点をあてて、どのようにして甲州金が製作され、貨幣的存在に至ったかを論じようとするものである。しかし、現段階でも史資料はなお不足の感も否めず、多くの検討課題が立ちだかっているが、すぐれたこれまでの先行研究に導かれつつ、この分野に一筋の方向性を見出したいと考えている。

I 甲州金成立期の研究略史

かつては、武田氏研究に連動して甲州金研究も活

況を呈していた。それらの内容は、平山優、西脇康の両氏による近年発表の論考の中に纏められているのであらためて詳細に述べないが、ここでは昭和40年代に発表された二つの論文をとりあげておく。

まず、齋藤廣宣氏の「近世初期から中期における甲州金について」¹⁾では、甲州金についてはその起源は一般的には戦国期の武田氏時代とされるとし、江戸後期に編纂された『甲斐国志』にも「正確には解らないが、武田氏時代にはじまった」と記述されていることを紹介している。また、信玄自身が部下に賞賜した記録や親族の穴山氏が徳川家康を介して織田信長に帰順したときに黄金二千枚を贈った記録があることも指摘している。ただし、これらは主に「賞賜・贈与・軍事上の支払い手段など特殊な目的を鑄造の動機」としたもので、一般の通貨として用いられたものではないとしつつ、それらの黄金というのは「碁石金・まね判・板金・竹流し金・露一両」などと呼ばれているもので、いずれも灰吹金であって、形や量目は不定で、秤量によって通用していたと述べ、極印はないものとあるものが存在するとした。齋藤論文の初期甲州金に関する記述の主要な点は以上のとおりであるが、もう一つの入江芳之助氏の「甲州金の歴史」²⁾という論文でもほぼ同趣旨の主張がなされている。ただし、さらに踏み込んで、砂金を溶融して甲州金という鑄貨をつくることの困難さから、信玄の偉業とするしかないであろうと述べ、とくに無名の古甲金については最も古い鑄造金貨であり、信玄は軍陣につねに携行していたとした。

こうした甲州金に関する初期の論文等を受けて発表されたのが平山・西脇の両氏の論文であるが、この両者の論文によって明らかにされてきた主要な成果や論点について以下に紹介しておく。

まず、近年発表された平山論文の重要な論点は、武田氏治世時に流通していた甲州金は碁石金・露金・太鼓判・板金・蛭藻金など多様なかたちを呈していたのであったが、その後に甲斐国を支配者した徳川家康による貨幣政策によって、このバラツキがなくされ、品質と規格を統一するなかで、全国に通用し得る貨幣として流通させ、貨幣経済の徹底と経済統制を図っていったとした³⁾。戦国期から織豊期に見られる多様な形態を呈していたいわゆる甲州金は、こうした規格等の統一政策によって急速にすがたを消していったとも指摘している。また、年不詳であった後藤光次等連署証文を慶長13年1月に比定しながら、その解釈などをとおして、戦国期の武田氏時代に流通していた多様なかたちの甲州金のその後の変移を説明したのである。徳川幕府の貨幣政策と絡めながら、甲州金の変遷を位置づけた点に注目すべきであろう。

一方の西脇康氏も次のように論じている。甲州金とは碁石状を呈した碁石金だけでなく、天文年間の史料にもとづいて、「小板」「大板」「星」などといった多様なものがあるとし、さらに慶長期に至ってもなお「丹波山金」「天神瓦」「上天神瓦」「中天神瓦」などの名称をもつ甲州金が通用していたことを紹介しつつ、甲州金が地金から金貨にいかに移行したかを問題とした⁴⁾。この点については、本稿の検討課題の一つともなっている。また、江戸時代からすでに、甲州金というのは銀気が少なく、かつ金位が高いことが知られており、そのために甲州金には、その高い金位を誇る地金という意味と甲州一国に通用した金貨という両方の意味が含まれているとも指摘している。甲州金の成立初期の重要な論点がここでも提起されている。なお、碁石形の露壺両判や壺分判、式朱判などの計数貨幣としての金貨制度の完成は武田氏滅亡後の、早ければ織豊期、遅ければ江戸初期ごろとする。

以上の平山、西脇の両者の論旨にみられるように、甲州金のこれまでの研究はとくに文献史料を中心に行われており、さまざまな問題点や今後の課題も浮きぼりにされているが、しかし近年の金山遺跡に対する考古学的、鉱山史的研究を踏まえての研究はこの段階でもほとんど手がついていない。本論のめざす骨子の一つはここにもある。

II 出土「甲州金」について

ここで、これまでに知られている出土「甲州金」について、以下の三例をとりあげて、その特徴について考えてみたい。

その前提として、ここで「甲州金」とは何たるかを述べる必要がある。『国史大辞典』をひもとくと、「甲州金」というのは「甲金」とも呼ばれ、武田氏時代に始まるとされるもので、江戸時代を通して、甲斐国都留郡以外の巨摩・山梨・八代の三郡で通用していた金貨と定義される。しかし、碁石金などの極印のないものや極印をもつまね金などの初期の「甲州金」とみられるものについては武田信玄時代の作かも知れないが、賞賜などのために鑄造されたもので通貨ではないとしている⁵⁾。この項を担当したのは小葉田淳氏ではあるが、これがこの当時における甲州金に対する代表的な認識でもあった。

ここに述べられている「甲州金」が通貨すなわち貨幣であるか否か、あるいは単に金の地金、金塊なのかはきわめて重要な問題であるが、ここではやや曖昧ではあるが、本稿でいう「甲州金」とは戦国期から江戸初期に至るあいだに、甲斐国等で成立した「碁石金」等の名称で呼ばれていたものを、従来の認識のとおり、一括して「甲州金」と呼ぶことにした。なお、この碁石状を呈したいわゆる「碁石金」の製作方法については後述することにする。

さて、出土甲州金の一つ目は、甲州市勝沼町上岩崎に所在する福寺遺跡から出土した甲州金である（口絵1参照⁶⁾）。

大菩薩峠に源を発する日川の左岸河岸段丘上の葡萄園において1969年に発見されたもので、出土遺物には甲州金と渡來銭がある。そのうち甲州金については「碁石金」18個と、いわゆる「蛭藻金」の2枚である。この遺跡の近在には国史跡の勝沼氏館跡や国宝の建造物を有する大善寺も存在する歴史性豊かな地でもあり、とくに勝沼氏館は戦国大名武田氏の親族である勝沼氏の居館であって武田信玄の叔父勝沼信友が住し、甲府盆地東部一帯に対する支配の要ともなっていたところである。甲州金に伴って多量の渡來銭も出土しており、埋蔵者は「甲州金」を貨幣として認識していたふしもある。出土銭貨などからみると埋蔵された時期は戦国期であろう。

出土している碁石金はいずれも小さな不整形の粒状を呈している。量目も13～15g前後で、18個の平

均は14.58gと報告されている。比較的光沢のある表面に対し、裏面は平らで泡状のような小孔を多数もち、表裏がきわめて対照的である。いっぽうの2点の蛭藻金は長楕円形を呈し、量目は碁石金に比べやや少なく13g強である。碁石金をもとに鍛造で形づくったようで表面には槌目がある。

この福寺遺跡出土の甲州金については近年山梨県立博物館による詳細な調査研究があり、多くの成果が得られている。たとえば、気になる金位であるが、分析結果によれば蛭藻金2枚はいずれも90%以上ときわめて高品位であり、碁石金については80%以上という、これもまた高品位である。これがいわゆる製錬の工程を経た結果なのかは後章で検討を行うことになるが、この点は甲州金の成立を考えるうえできわめて重要である。

二つ目は、長野県下諏訪町に鎮座する諏訪大社秋宮境内発見の甲州金⁸⁾である。発見されたのは昭和10年(1935)年と古く、その当時大きな話題となったものである。発見されたのは古瀬戸香炉におさめられた蛭藻金11枚、碁石金31個、金製刀装具3点の計45点である。発見からしばらくして大場磐雄博士や地元の考古学者の藤森栄一氏らによって概要が報告されており大要を知ることができるが、近年では

貨幣史研究の立場から永井久美男氏によってとくに甲州金に焦点をあてた調査も行われている。出土した蛭藻金や碁石金等の形状や量目などについては同氏が詳細な報告を行っている⁹⁾ので、それらを参照されたいが、ここではいくつかの点について紹介しておきたい。

蛭藻金11枚については、槌目のものがそのうちの6枚、「上」の字が印刻されているものが5枚ある。量目や形状はそれぞれ異なるが、平均量目は15gである。碁石金は、先の福寺遺跡出土の甲州金とほぼ同じような量目・形状を呈しており、製作技術が同じであったことを示唆している。埋蔵された時期は戦国期とみて大過ない。

もう一カ所は山梨県笛吹市春日居町下岩下出土の大判金など3枚である(口絵1参照)。これもまた発見は古く大正7年(1918)年のことで、現在は東京国立博物館に収蔵されている。形状は大判状を呈した2枚と長方形1枚で、量目は160g前後で、量目からすると碁石金の約10倍である。そのうちの1枚には「上」字の刻印がある。

出土地の付近は武田信玄の父信虎の誕生屋敷と伝承される場所などがあり、甲斐武田氏のゆかりの地である。埋蔵された時期を示す手がかりは少ないが、

第1表 福寺遺跡出土甲州金調査結果一覧(同遺跡報告書より)

(香名貴彦氏作成)

資料 No.	1. 各計測値			2. 密度法による金品位測定結果			3. 蛍光エックス線分析による定量分析結果			4. 蛍光エックス線分析で確認した付着不純物に含まれる特徴的な元素
	長辺長 (mm)	短辺長 (mm)	厚 (mm)	質量 (g)	密度	金品位* (wt%)	Au (wt%)	Ag (wt%)	Cu (wt%)	
01	51.1	23.8	0.8	13.41	17.84	90.1	91.3	8.5	0.2	鉄
02	51.5	24.2	0.8	13.15	18.39	94.0	94.1	5.7	0.2	鉄
03	24.6	14.7	4.5	13.64	17.75	89.5	91.6	8.1	0.3	タングステン、カルシウム
04	19.6	15.6	5.1	15.75	17.56	88.1	89.6	10.0	0.4	ビスマス、鉛、タングステン、ヒ素
05	21.5	17.9	3.8	14.31	17.29	86.1	92.2	7.6	0.2	ビスマス、テルル
06	22.3	15.9	4.8	15.17	17.61	88.4	91.2	8.7	0.1	ビスマス、ヒ素
07	17.0	15.5	4.6	13.92	不明**		91.3	8.4	0.3	ビスマス、鉛
08	19.4	14.0	6.0	13.63	17.53	87.8	89.3	10.4	0.3	ビスマス、テルル
09	22.3	17.0	4.1	14.53	不明**		86.8	12.9	0.3	ビスマス、タングステン、テルル
10	23.7	13.6	5.1	14.47	不明**		90.7	8.9	0.4	ビスマス、タングステン、鉛
11	18.9	18.1	4.3	14.87	17.46	87.3	90.7	9.0	0.3	ビスマス、鉛
12	18.1	15.0	5.5	14.18	不明**		89.1	10.7	0.2	ビスマス、鉛
13	20.1	17.1	4.1	14.31	17.44	87.2	91.1	8.6	0.3	ビスマス、テルル
14	20.5	19.1	3.5	15.09	17.52	87.7	93.9	5.9	0.2	ビスマス
15	19.2	17.4	4.7	13.75	17.68	88.9	90.7	9.1	0.2	ビスマス、タングステン、トリウム
16	23.5	15.1	4.4	14.77	17.44	87.2	90.5	9.4	0.1	ビスマス、タングステン、ヒ素
17	23.6	14.8	5.2	14.73	17.62	88.5	91.7	8.1	0.2	ビスマス、タングステン、ヒ素
18	22.1	15.4	4.3	15.26	不明**		89.3	10.4	0.3	ビスマス
19	19.2	17.0	4.2	14.43	17.43	87.1	90.4	9.1	0.5	ビスマス、鉛、テルル
20	19.1	17.0	4.2	15.64	不明**		92.1	7.7	0.2	ビスマス、タングステン、ヒ素

* 密度を元に、金-銀の二元合金として算出した。
 ** 碁石金表面に土砂等の付着物が存在したため、密度は計測せず。

これもまた戦国期として大過ないであろう。

以上の他にも山梨県北杜市高根町などにも同じような発見地があり、このような状況を見ると中世後半の戦国期には碁石金などの甲州金が多数製作され市中に流通していたことを示唆している。

Ⅲ 戦国期金山における「金付着土器」について

ここでは、初期甲州金製作に深く関わると思われる金粒が付着している土器をとりあげてみよう。

金粒が付着している土器とは、ほとんどが口径10cm内外の皿状を呈したいわゆる「かわらけ」と称されている素焼きの土器である。中世社会では日常的に使用されていたもので、器種も大から小まで用途に応じてバラエティーに富んでいるものであるが、金粒が付着している土器はそのうちのやや小さいものがほとんどである。それらの土器の内面に金粒が付着していることが多いことから、この土器を使用して金鉱石を製精錬ないし溶融していたことが明らかである。

金付着土器の出土地点をみると、現段階ではおおよそ三つである。一は、金鉱石を採鉱していた金山遺跡の現場からである。わが国の鉱山遺跡に対する考古学的研究の先鞭をつけた山梨県の黒川金山遺跡¹¹⁾や湯之奥金山遺跡¹²⁾、それに長野県川上村の梓久保金山遺跡¹³⁾である。そのうちの黒川金山遺跡ではかなりの金付着土器が検出されており、この土器が金鉱石の製精錬ないし溶融などに頻繁に使用されていた様子が窺われる。

出土地の二は、都市遺跡内からの出土である。近年戦国期の都市遺跡に対する調査研究が急速に進んでいるが、そうした遺跡内から金が付着した土器の発見も相次いでいる。この分野の研究を精力的に進めている国立科学博物館の沓名氏らの調査によれば、戦国期甲府城下町のほかに山口県の大内氏の城下や大分県の豊後府内などその数はかなりのものになる¹⁴⁾。戦国期の都市内でもこの土器がかなり普遍的に使われていたことがわかる。その三は、きわめて特異の例であるが、先に紹介した山梨県甲州市に所在している勝沼氏館跡の内郭からの出土である¹⁵⁾。のちに詳しくとりあげることになるが、鉱山遺跡でもなく消費地の都市遺跡でもないこのありようは、いったいどのように解釈すべきであろうか。

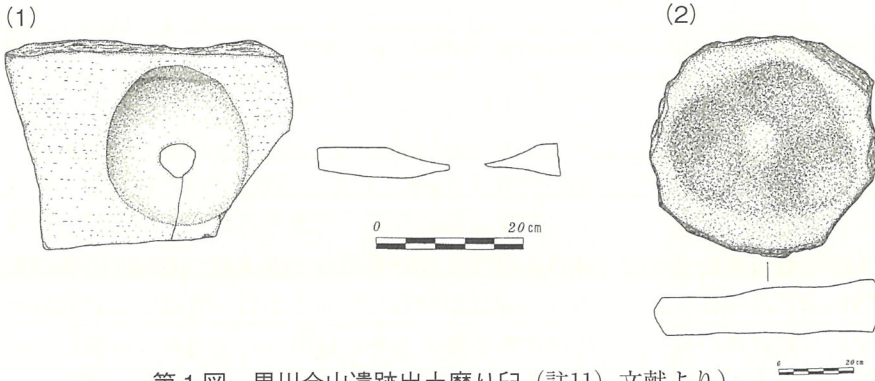
第一の金山遺跡における金付着土器の用途については比較的説明がたやすい。すでに黒川金山遺跡の調査報告書において今村啓爾氏が「金製錬の最終作業である砂状の金を溶融し固める作業があちこちで行なわれていた¹⁶⁾」と述べているように、採掘した金鉱石を粉碎したあと、それを溶融するための道具として使われていたことになる。しかも、この製精錬作業は金山衆ごとに行われていたとの指摘も重要である。この場合、製精錬という表現が的確かどうかは議論の余地があるが、要するに金鉱石から金を抽出する工程において使用されたものであろう。一方の第三の、消費地での金付着土器については金細工関係で使用されたものにほぼ間違いのないであろう。ちなみに戦国期甲府城下町遺跡では、これまでの発掘調査において、広範囲に相当数発見されており¹⁷⁾、金に関わる工房が城下に多数存在していたことを窺わせている。このような類例は、今後全国各地で加速的に増加していくと思われる。

Ⅳ 「甲州金」に至る技術的過程

それではここで、埋蔵された出土「甲州金」の成立に至る技術的過程とその工程について、前述の金付着土器のありようと重ねながら検討してみよう。

まず、甲斐金山からの金鉱石の採鉱であるが、すでに湯之奥金山遺跡での学術調査成果でも知られているように、採鉱された金鉱石は主に表土に近い酸化富鉄帯の鉱石で純度の高いものであった。黒川金山や湯之奥金山の鉱石の分析結果によれば、これらの甲斐金山から産出される鉱石は金の含有率が圧倒的に多く85%を超えており、他には10%程度の銀で、その他はビスマスなどが1%以下である。なお、このビスマスという鉱物は甲斐金山のほか長野県の川上村梓久保金山遺跡の金鉱石等に含まれており、甲州金の金原産地を探る有力な鍵となるものである。

この表土に近い酸化富鉄帯に堆積している甲斐や信濃の金山から産出される金鉱石は脆く、かつ不純物が少ないため、こののちの粉成作業や製錬作業を容易にした。また、井澤英二氏の研究によれば、甲斐金山の金鉱石は中熱水鉱床で生成されているために品位は高く、かつ製錬等の複雑な技術工程はいらず、溶融等の比較的簡易な作業によって玉金などを製作することができるものであった¹⁸⁾。他地域に先駆けて金山開発が開始され、甲州金などの製造が始



第1図 黒川金山遺跡出土磨り臼(註11) 文献より
(1) A 地点出土 (2) 表採

まったのも、甲斐金山のこうした特徴があったからであろう。

純度の高いこれらの金鉱石が採掘されたのちに粉碎作業に入るのであるが、この粉成作業に使われたのが鉱山臼である。甲斐金山遺跡内には挽き臼などの多数の鉱山臼が散乱しており、粉成作業の盛んな様子も窺われるが、この鉱山臼の中に特徴的な臼がある。かなり大きい石皿状の、磨り臼と呼ばれている鉱山臼である。この大きな平板状の石の中央部分がすり鉢状に掘り込まれており、こぶし大の磨り石を持って鉱石を磨り潰していたようである。磨り臼は相当磨り込まれていたようで、磨り面はつるつるの状態になっている。この工程で金鉱石は粉末状態になる。次にこの粉末状の金は素焼きのかわらけの中におかれる。この「かわらけ」とはむろん先に述べた金付着土器である。この段階で、金の量はおよそ四匁に測られ、量目の統一が行われたと思われる。

素焼きのかわらけの中におかれた粉末化された金はこののち炉の上で加熱されることになる。土器の分析結果をみると、鉱石由来の微量の鉛の他、灰吹法に必要となる量の鉛が検出されないことから、鉛は添えず、金そのものに直接強い熱が加えられたようである。出土しているかわらけの詳細な観察によれば、かわらけそのものは高熱によって細かく破碎しており火力の強さがうかがえるが、かわらけの底面は火を受けていないため、上方から直接かわらけの中の金粉に強い熱を加えたことがわかる。微細にみると、火力は一方向から加えられたようで、かわらけの片方の口縁部の方の燃焼度が強い。しかも、かわらけ自体もやや傾かせていたようである。

この加熱によって、金は玉状になる。この玉状の金はしばらくすると冷却ししだいに扁平な碁石状を

呈した金になる。これが、いわゆる「碁石金」と呼ばれているものであり、吹金と呼ぶこともあるが、灰吹法のように骨灰も不要で、しかも鉛もいらぬ。ただ単に溶融するだけで十分である。元禄年間に成立した『至寶要録』にも、金については銀製錬と異なり、「いろりにて火吹を以て口吹にすれハ、金に成也」¹⁹⁾と

記されているように、鉛を使う灰吹法ではなく、単に口吹きによる加熱だけで金の塊を製作していたのである。

金山遺跡の現場作業はこの段階で終わり、この金の塊が流通することになる。重量もほぼ統一化されているが、金銀以外の不純物に対する精錬はおそらく行われていない。山梨県勝沼町の福寺遺跡出土の甲州金の一部に目に見える状態の鉄分が残存しているのはこのためであろう。

この工程で重要な役目を果たしていたのが、磨り臼と小型のかわらけであった。金鉱石はこの工程においてまず粉末状態にしなければならず、そのために必要な道具が磨り臼であった。挽き臼のみでは粉末化は困難であったのであろう。この磨り臼について、甲斐黒川金山遺跡の調査において、今村啓爾氏は「わが国でもとくに古く金鉱石の採掘が始まったとみられる甲斐・駿河の金山の分布とほぼ重なる²⁰⁾」と位置づけており、また武田氏領域内の金山に特有な臼とも述べているが、金の品位の高い甲斐金山の金鉱石を粉末状態になるまで磨り潰すためのこの工程において必須の道具であったことがわかる。

いっぽうのかわらけについては、強い加熱に耐えられる素焼きの土器が使われるが、粉末状態の金を溶融し玉金にするための手ごろな容器として、比較的小さなかわらけが使われた。口径の大きなかわらけでは金の粉末が分散して不都合であったに違いない。

勝沼町の福寺遺跡や諏訪大社下社秋宮発見の碁石金は、こうして製作されたものであろう。それらの碁石金がおおむね4匁に近い量目になっているものの、子細にみると、第1表にみるように、微妙な差異があることがわかるが、これはおそらく溶融前に金に混在していた不純物の量の差異が影響している

のであろう。量目を統一しようとする意識は強いものの、この段階の技術力ではこうした微妙な差異を払拭できなかつたのにちがいない。

ここで興味深い分析がある。福寺遺跡の碁石金の金位は、分析データによれば、86.8～93.9%とばらつきがあるのに対し、伴出している蛭藻金2枚の金位は90%を超えている点である。また、碁石金からはビスマスや鉛、テルルなどの鉱物由来とみられる元素が確認されるのに対し、蛭藻金には鉄以外の目立った元素がみられない点である。このことから確認できる重要な点は、少なくともこの2枚の蛭藻金は、これらの碁石金をそのまま叩きのばして製作したものではないということである。ということは、他地域の金山産出の金鉱石を使用したものなのか、不純物が少なく高品位の砂金を使用して製作したものか、あるいは碁石金からこの蛭藻金を製作するまでに、不純物を除去し純度をさらに高めるためのもう一つの技術的工程が存在していたのか等々、いくつかの可能性を考えなければならない。

上記から、つぎの点が想定される。

福寺遺跡や諏訪大社秋宮出土の金は、金山遺跡内においてかわらけを用いて溶融された玉金ないし碁石金そのものであり、そのためにさまざまな鉱物由来の元素が混じったままの状態でも市中に流出したようである。不整形で、かつ裏面には泡状の小孔を残したままの状態である。一方の蛭藻金については、その製作段階において小判形にかたちが整えられて市中に流入していた。また、特筆すべきことは不純物がきわめて少ないことであり、この点については異なる金鉱石等が使用されたものか、あるいはもう一段階別の作業が行われた可能性を考える必要がある。

V 勝沼氏館跡の金工房跡について

ここで、勝沼氏館跡で検出された金工房跡について、その史的意義について検討してみたい。

ここに本拠を構えた勝沼氏は戦国大名甲斐武田氏の有力な親族衆であり、武田氏内部でも重要な立場にあった。館自体も中核的な郭を中心としていくつもの外郭をつくり、堀や土塁で防御された広大な城域を有している。この館の中心郭の内部に金工房が設けられており、その役割の重要性を窺い知ることができる。

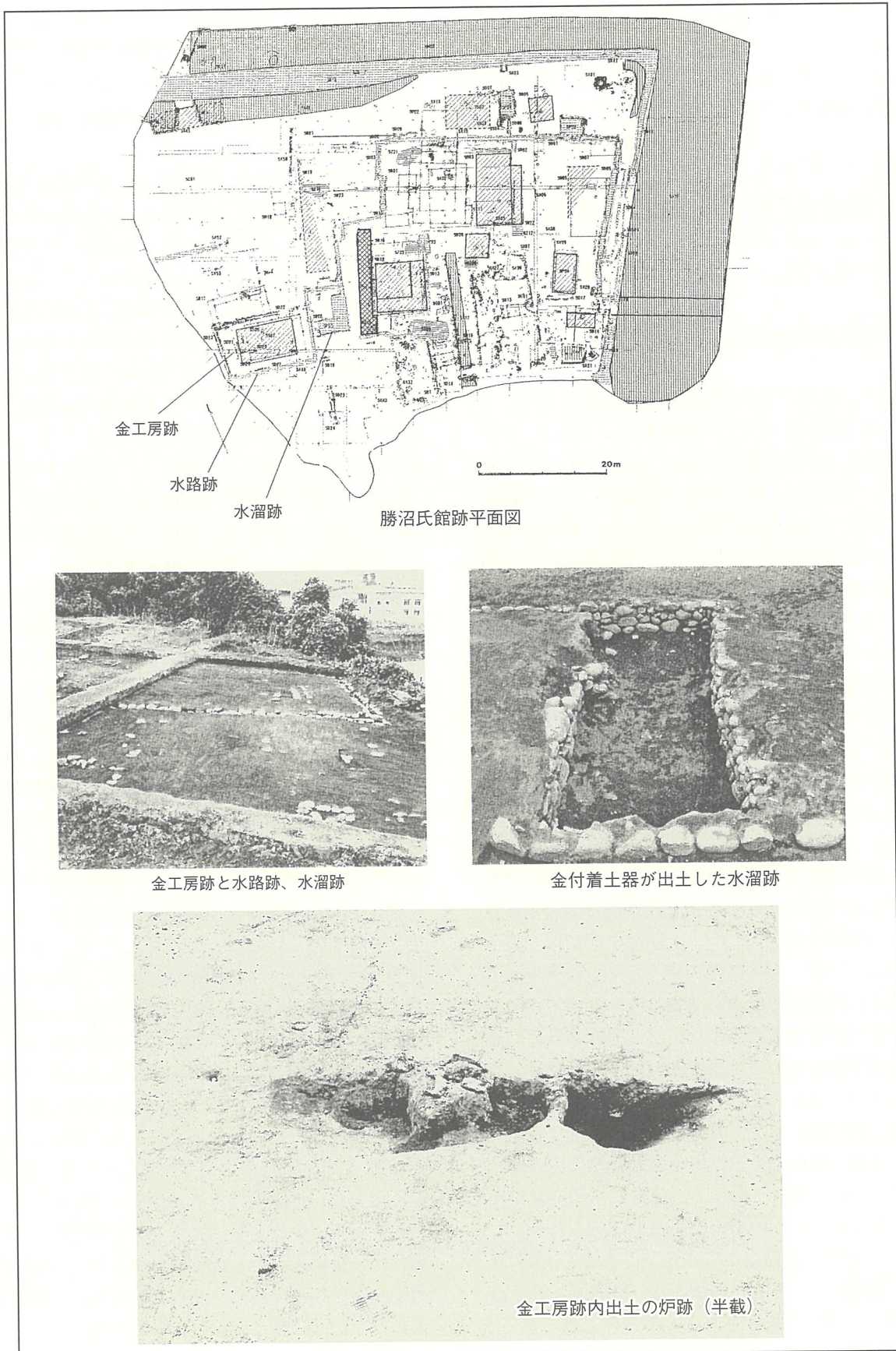
検出された工房跡は4間×2間の、東西8.67m、南北5.60mの規模をもち、柱間も2.17mと他の建物跡よりも広く、床は土間構造である。工房の隅に地床炉をもっている。この工房の周囲には縁石をもつ水路がめぐり、すぐ近くには水溜も設けられており、火に対する備えも万全である。この工房が館の南西端に設けられているのも、火に対する用心であったろう。金粒が付着しているかわらけは、これらの水路跡や水溜跡を中心に検出されており、高熱によって細かく破碎したかわらけ片を水中に投げ入れたのであろう。²²⁾

それではこの工房でいったい何を製作していたのだろうか。製作用の道具類はなく、工房やその周辺からは鉱石のズリや粉成後に生じるユリカスなどもなく、金山遺跡とはありようが異なっている。これらの状況から、ここで行われていた作業というのは、金鉱石からの金の抽出作業ではなく、その後の工程が行われていたことになる。むろん、消費地である都市遺跡内で行われている金細工関係の施設でもない。なによりも、戦国大名クラスの重要な施設内で行われていた作業である。

ここで検出されたかわらけに付着していた金粒には、分析結果によれば黒川金山などの甲斐金山に特有のビスマスが含まれており、産出地として黒川金山が有力視されているが、出土遺構や伴出遺物等から、ここに運ばれていたのは粉成後の砂金状態の金か、玉金等であったにちがいない。産金地でもなく、消費地でもないこの工房では、いったい何を製作していたのだろうか。

ところで、上記の点に関連して福寺遺跡の碁石金等の分析を行った沓名氏は、この碁石金と蛭藻金の両者は製造場所が異なるであろうことを示唆している。²³⁾ 黒川金山遺跡の調査を行った今村啓爾氏もかつて以下のような指摘を行っている。本館跡の工房跡の存在意義を考えるうえで重要であるので、ここに紹介しておく。

「黒川千軒では小グループごとに金の熔融作業を行っていたのであるから、権威を必要とする量目の認定保証がそこで同時に行なわれたとはとうてい考えられない。それはまた別の機会に行なわれたと考えなければならないであろう」。²⁴⁾ 要するに、黒川金山では、量目の統一などの作業が行われていたのではなく、別の場所の、別の段階で行われていたと指摘しているのである。両氏の以上の指摘を踏まえ



第2図 勝沼氏館跡の金工房跡

ると、この館の工房の存在意味が一層明瞭さを帯びてくる。

それにしても、戦国大名クラスと金との関わりがこれほど露骨に示された事例は珍しい。この遺跡の存在によって、戦国期において、権力層が直接金に深く関与していたことも明らかになった。これが、初期産金地を多数抱える甲斐武田氏に特徴的なありようなのか、あるいは普遍性をもつものなのか、今後類例の増加を待って検討を重ねる必要がある。

VI 甲州金の貨幣化

諏訪大社秋宮出土の金貨の詳細な計数を紹介した永井久美男氏は、興味深い指摘を行っている。それは、武田信玄が戦の際の賞賜として携行していた碁石金というのは、「極印のない金粒か、あるいは初期の甲州金である可能性が高い」とし、秋宮出土の碁石金や蛭藻金は、「近世的な金貨が形成される初期段階の資料として重要であり、その機能には計数貨幣と秤量貨幣の両者を備えていたと考えられる」と述べている点である²⁵⁾。永井氏はこのレポートの冒頭、碁石金というのは単なる金粒というべきか、あるいは貨幣というべきかと重要な問題も提起している。

本稿の重要な論点の一つも、これら出土碁石金などを単なる金粒や金の塊とみるべきか、あるいは貨幣としての初期金貨とみるべきかであった。

金の貨幣化をめぐる議論はこれまで多くの研究者によって追究され、さまざまな観点から論じられてきた。小葉田淳氏をはじめ、永原慶二氏や桜井英治氏、中島圭一氏、森本昌弘氏や、近年では田中浩二氏が多くの魅力ある論考を発表してきている²⁶⁾。ここで、改めて整理する余裕はないが、それら多くの論考の中で本稿に関わる重要な論点について紹介しながら若干の私見を加えることにしたい。

金は、銀に先行して、有力寺社への奉納や戦国大名間、あるいは中央の貴族等への贈賜等に使われていたことは、衆目の一致する点である。甲斐武田氏を例にしても、多くの事例が記録上にあらわれ、しかも早い時期から行われていたこともわかっている²⁷⁾。しかし問題は、こうした奉納あるいは贈賜された金はその後いかなる経緯を辿るのかという点である。むろんそのまま保管状態に置かれたままではなく、金はそれ自身、米や銭、あるいは等価値をもつ商品

などとの交換、媒体になっていったのであろう。なかにはそのまま金地金として装飾に使われることもあったにちがいない。そういう一定の価値のある存在であるからこそ奉納や贈賜に盛んに利用されたのであろう。

金が貨幣的存在として使用された直接的な事例もある。永原慶二氏は『実隆公記』の永正3年(1506)8月22日条に、「甲斐国某」に所蔵の『源氏物語』を黄金5枚で売却していることを紹介している²⁸⁾。ここでいう「甲斐国某」というのは、永原氏も指摘しているように、おそらくは武田氏であろうが、この事例は既に金が貨幣として使われたことを示している。ここでいう「枚」という単位の金は今までとりあげてきた春日居町出土の「甲州金」と同じ量目と形状を呈していたものであろう。永正3年の記事であるから16世紀の相当早い時期のことである。甲斐国内をみるとそのころには既に金山開発が始まっており生産量も高まっている時期である。

永原氏は、そのレポートの中で、小葉田淳氏が永禄年間ごろから金の貨幣化が始まるとの見解を示していることに対して、他の事例もとりあげながらそれよりも早く金の貨幣化は始まっていることを提起したのであるが、この点は金山開発がいつ始まり活発化したかという点と深く連動している。

山金を主体とする金山開発が最も早い地域は甲斐や、おそらく東北地方であろう。冒頭述べた中熱水鉱床で生成された金山が列島上において最も早い段階から開発されたのであろうが、調査研究が早くから進んでいる甲斐の金山開発は15世紀後半ないし末頃には始まっていることがわかっている²⁹⁾。16世紀の初頭というのはまさに生産量が高まった時期にあたる。この点に関しては、田中浩司氏が京都真珠庵の「祠堂銭納下帳」の分析の中で「東国の各国で、小葉田氏の提起された十六世紀半ばより以前、すなわち十六世紀前期段階に、すでにある程度の量の金の生産が確実に行なわれていたことを示している³⁰⁾」と述べていることに、おおよそ一致している。従前は、金山開発は16世紀半ばごろに始まったとみられていたが、近年の金山遺跡に対する調査研究の成果によれば、15世紀末ないし16世紀初頭にはすでに開発が始まったとされており、金の貨幣化への土壌はその頃には十二分に整っていたことになる。

金山で得られた金は、自然の作用によって高品位の金になる砂金とは違って、粉碎し不純物を取り除

く作業が必要となる。そのために開発初期から一定の技術的工事が成立していなければならない。土器を使って加熱し、玉金状態にする技術もすでにこの段階から出来上がっていることになろう。

ところで先述した出土甲州金は、バラツキはあるものの、おおよそ量目が統一されていることを指摘してきたが、このバラツキは、既に述べてきたように、不純物の多寡による差異であろうと想定している。しかし、ほぼ1両という量目を志向していることは確かである。春日居町出土金は、その10倍すなわち「枚」という量目をもつものであるが、この量目を統一しつつ、さらに「枚」という単位の判金まで製作していたというのは、明らかに貨幣化をめざしていたことになる。

ここで注目したい点は、18粒の「碁石金」と共に出土した福寺遺跡出土の蛭藻金2枚である。この蛭藻金は碁石金とは異なり不純物が少ないために、先述したように、他金山の金が使用されたものなのか、あるいは何らかの技術工事が加えられて製作されたものなのか、検討を加えなければならない。さらに、小判型の形状がなぜ生まれたのかを含めて考えると、碁石金とは異なり、もはや単なる金粒とか金の塊とはいえない。

もう一つ大変興味深い分析結果がある。近世の小判などの表面処理方法に「色揚げ」ないし「色付け」という技法がある。特に江戸中期以降、金含有量が減る小判に対してもっぱら施された技法とされてきたが、これが近年の研究によって慶長小判についても施されていたという注目すべき成果が発表されている。その分析結果によれば、色揚げ技法は近世初期まで遡ることになり、小判製作の相当早い段階からこうした技法が存在していたということになる。これと同様な分析結果が先の勝沼町福寺遺跡の蛭藻金についても出されている。この分析結果についてはさらに検討を重ねる必要があるが、しかしこの分析結果に従えば、戦国期に出現するこれらの蛭藻金にも色揚げの技法が採り入れられていたことになり、少なくとも蛭藻金に関しては往時貨幣的存在として相当強い意識が働いていたことになろう。³¹⁾

このころの金は品位や量目に不統一がみられることはすでに多くの論者によって指摘されていることであり、記録上にも現れている。それが統一されるのは、のちのことであるが、しかし16世紀の早い段階から金の貨幣化が進行していたといえそうである。

おわりに

以上述べてきた諸点について、ここで改めて整理しながら、今後の課題や研究の展望をのべてまとめにかえたいと思う。

(1) 金山の現場において、いかなる技術的作業が展開されていたかについては、近年の研究において、おおよそその実態が明らかになってきた。採鉱された金鉱石は、その場において粉成(こなし)をされ、粉末状態になるまで丁寧な作業が繰り返される。その後、この粉末状態になった金を小型のかわらけの中に入れて上方から強い火力を加えていくと、粉末状態の金はこの作業によって熔融し、やがて玉金状態になる。しばらくして冷却してくると、この玉金はしだいに碁石状になっていく。ここでは鉛などの媒体は不要である。単に加熱するだけで十分である。

こうしてできた碁石状の金、すなわち碁石金は一部は為政者によって徴収されて為政者の重要な財源となり、他は金掘りたちの取り分となって、商人らを介して市中にもたらされる。

都市などに流入したこの碁石金と呼ばれている金は、一部は素材としての金となり、一部は貨幣的存在として寺社、大名や貴族等への奉納や贈答品となっていく。量目をほぼ統一しようとしているのは、金素材として売買するうえでも、また貨幣的価値としても必要であったからであろう。

ここまでの、金採鉱現場である金山で金掘りたちが繰り返し広げていた技術的工事がであった。

(2) ここで問題となるのは、おおよそ1両の量目をもつ蛭藻金と「枚」と認められる春日居町出土のような大型の判金の存在である。福寺遺跡出土の蛭藻金は元素分析の結果から碁石金に比べ品位が高くビスマスなどの元素が消失していることがわかっている。他金山の金鉱石を使用したものか、あるいは碁石金などを何らかの技術によって品位を高めつつ叩きのばしていったのである。福寺遺跡出土の蛭藻金の質量が碁石金に比べ、やや減じているのも気になる点である。

その「場」がどこかは、とうぜん重要な問題となろう。既にとりあげてきた勝沼氏館内の工房などはその候補地の一つとしてあげることができそうである。

(3) 諏訪大社秋宮出土のさまざまな形状を呈した

金製品はどのように考えるべきであろうか。むしろ、秋宮出土品は、一括出土しているものの、秋宮への永い間における奉納物であったもので、これを同時期に同じ意図によって製作されたものとしてとらえる必要はない。金は、さまざまな形状を呈しながら市中に流入していたという一つのあり方を示しているにすぎない。

ここで重要なのは多量に出土している碁石金の存在である。この碁石金はそのまの形状でも奉納物となっていた点は重要である。盛本氏が述べているように「当時流通していた金は様々な形態があった³²⁾」のであるが、そのなかにはほぼ同じ量目で製作されていた碁石金が併存していた事実には注目しなければならない。また氏は、文禄2年正月の松平家忠の金子1枚を吹かせている事例から「必要に応じて一定の重量の金貨を鑄造させていた³³⁾」とも指摘しているが、こうしたことはかなり早い時期から行われていた可能性がある。なお、量目をおおよそ統一しようと試みているものの微妙なバラツキがある碁石金については、繰り返すことになるが、そのままの形状と不統一の量目で市中に流入していたのである。

慶長8年（1603）の「於曾御蔵入丑之年払」をみると、「こいし金」や「中天神瓦」「庄三郎判」などといったさまざまな名称をもつ金が存在していたことがわかる。このころにおいても、金はさまざまな形状と名称をもつものが市中に出回っていたのであり、同時に形状がほぼ整えられた蛭藻金などの判金も併存していたのである。

（4）しかし、残された課題も決して少なくはない。第一に、蛭藻金や「枚」単位とみられる大型判金の出現時期である。既に知られている記録によれば、16世紀の前半には製作されていたことになるが、しかし裏付け資料は乏しい。また、玉金や碁石金等から蛭藻金などの判金を製作した契機はいったい何であったのかも判然としない。その点について、桜井英治氏が述べているように、16世紀初頭ごろには金は遠隔地間での決済手段としてクローズアップされてきたという発言には注目しておきたい。

ところで、肝心の碁石金等から蛭藻金や大型判金製作への技術工程も未だ十分に明らかになっていない。その段階ではどのような技術的工程が加えられていたのだろうか。金山の現場において溶融によって不純物の除去もある程度行われていたのであるが、さらに品位を高める方法とはどのようなもので

あったのか。福寺遺跡の蛭藻金の分析結果では鉛は検出されず使用されていないことはわかっている。

さらに、蛭藻金や大型判金の製作の「場」の問題も残された課題である。戦国期の早い時期の製作場所についてはほとんど明らかになっていないが、先に述べた勝沼氏館跡などもその一つとみているが、都市内でもとうぜん行われていた可能性はある。今後に残された課題の一つである。

以上、甲州金の成立期の一過程と題して、とくに技術的工程を含めて縷々述べてきたが、現段階ではなお雑駁な感をまぬがれない。資史料の不足などから推測を重ねてきたきらいもあり、金山で採掘された金のごく大雑把な貨幣化への道筋を示してみたいに過ぎない。今なお、多くの課題や問題点を残していることは承知している。多くの方々からご批判、ご指摘をいただければ幸いである。

なお、末筆ではあるが、本稿を草するにあたり、帝京大学文化財研究所の研究者をはじめ多くの方々からご指導ご助言をいただいた。また、資料等の掲載にあたってご快諾いただいた東京国立博物館や山梨県立博物館等に対しても厚く御礼を申し上げる次第である。

註

- 1) 齋藤廣宣「近世初期から中期における甲州金について」『信濃』第21巻第1号、信濃史学会、1969
- 2) 入江芳之助「甲州金の歴史」『甲斐路』第20号、山梨郷土研究会、1971
- 3) 平山 優「近世初期甲州金成立過程の研究」飯田文彌編『中近世甲斐の社会と文化』岩田書院、2005
同「甲州金成立期にかんする覚書」『山梨県史研究』第14号、2006
- 4) 西脇康「甲州金」『山梨県史』通史編3・近世1、山梨県、2006
- 5) 『国史大辞典』第5巻、1985
- 6) 中山誠二他『福寺遺跡』山梨県立博物館調査・研究報告8、2014
- 7) 沓名貴彦「出土資料の科学調査からみた中世甲斐における金生産技術」『甲斐金山における金生産に関する自然科学的研究』山梨県立博物館調査・研究報告5、2013
同「蛭藻金、碁石金の科学調査」註6)『福寺遺跡』所収。
- 8) 藤森栄一「秋宮経蔵下の埋蔵金と経塚—諏訪神社の考古学的研究(2)—」『信濃』第13巻第12号、信濃史学会、1961
大場磐雄「諏訪大社秋宮発見の経塚—附 黄金入塚とその意義について—」『信濃』第15巻第10号、信濃史学会、1963

- 9) 永井久美男「諏訪大社秋宮出土の金貨」『出土銭貨』第14号、出土銭貨研究会、2000
同「甲州金から慶長小判へ」『金山史研究』第4集、甲斐黄金村・湯之奥金山博物館、2003
- 10) 沓名貴彦「貨幣としての金と銀」『黄金の国々—甲斐の金山と越後・佐渡の金銀山』展示図録、同実行委員会、2012
- 11) 黒川金山遺跡研究会『甲斐黒川金山』塩山市・塩山市教育委員会、1997
- 12) 湯之奥金山遺跡学術調査会他『湯之奥金山遺跡の研究』1992
- 13) 長崎治『梓久保金山遺跡B地点発掘調査報告書』川上村教育委員会他、2008
同「梓久保金山遺跡の概要」『甲斐金山における金生産に関する自然科学的研究』山梨県立博物館調査・研究報告5、2011
同「梓久保金山遺跡」『日本の金銀山遺跡』高志書院、2013
同「川上村梓久保金山遺跡B地点を例とする挽き白へのリンド導入時期について」『長野県考古学会誌』152、2016
- 14) 沓名貴彦「金粒子付着遺物からみた金生産技術」註10) 所収。
- 15) 甲州市教育委員会『史跡勝沼氏館跡—内郭部発掘調査報告書(中世編)』2010
- 16) 註11) に同じ。
- 17) 佐々木満「金付着土器の考古学的所見」註7) 文献所収。
- 18) 井澤英二「前近代における金銀鉱業の鉱山学」『日本の金銀山遺跡』高志書院、2013
- 19) 花石公夫「至宝要録に関する2～3の提言」『日本鉱業史研究』No.66、2013
- 20) 註11) に同じ。
- 21) 註7) に同じ。
- 22) 註15) に同じ。
- 23) 註7) に同じ。
- 24) 註11) に同じ。
- 25) 永井久美男「諏訪大社秋宮出土の金貨」『出土銭貨』14、2000
- 26) 桜井英治「日本中世における貨幣と信用について」『歴史学研究』703、1997
永原慶二「中世貨幣史における金の問題」『戦国史研究』35、1998
盛本昌広「豊臣期における金銀遣いの浸透過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』83、2000
田中浩司「16世紀前期の京都真珠庵の帳簿史料からみた金の流通と機能」『日本中世史の再発見』吉川弘文館、2003
中島圭一「京都における『銀貨』の成立」『国立歴史民俗博物館報告』113、2004
田中浩司「十六世紀後期の京都大徳寺の帳簿史料からみた金・銀・米・銭の流通と機能」『国立歴史民俗博物館研究報告』113、2004
- 27) 海老沼真治「武田氏における黄金の使用について」『戦国大名武田氏の役と家臣』岩田書院、2011
同「『甲陽軍鑑』における金の使用事例」『山梨県立博物館研究紀要』7、2013
- 28) 註26) 永原慶二論文。
- 29) 甲斐湯之奥金山遺跡等の調査研究の成果や『王代記』等の史料により、15世紀末には「山金」すなわち金山開発が開始されていたことが判明している。甲斐金山の開発については従来の説よりかなりさかのぼろう。
- 30) 註26) 田中浩司論文。なお、駿河・伊豆の金山開発と同時に甲斐の金山開発もこのころ盛んになされていた。
- 31) 齋藤努「江戸期小判などの色揚げに関する自然科学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』183、2014
註6) の沓名貴彦氏の報告文参照のこと。
- 32) 註26) 盛本昌広氏論文。
- 33) 同上。
- 34) 註26) 桜井英治氏論文。

